

## もっと現場を知る！職員短期派遣研修報告書

所属名	県央県土整備事務所	氏名	富岡 泰之
派遣先団体名	NPO法人あしぶえ		
研修の日時・内容			
<p>ア 劇団コーパス公演「ひつじ」手伝い（7月10日、11日） 松江市芸術文化教育振興事業として、カナダから来日した劇団「コーパス」による公演「ひつじ」の補助作業を行った。 具体的には、しいの実シアター前庭・松江清心養護学校において開催された公演において、会場準備・清掃、駐車場係等に従事した。</p> <p>イ 仁摩小学校1年生と6年生のワークショップ参加（10月4日） あしぶえが表現・コミュニケーション能力育成事業として実施しているワークショップのうち、小学生を対象として実施されたものに参加。</p> <p>ウ しいの実シアター・地域の道路草刈り（10月27日） あしぶえでは、毎年、地域ボランティアの協力を得ながら、春秋に1度ずつしいの実シアター周辺の草刈り・溝掃除を行っており、このうち秋の会に参加。</p> <p>エ 劇団あしぶえ公演「安寿と厨子王」手伝い（10月6日、11月3日、24日） 文化庁平成25年度劇場・音楽堂等活性化事業として開催された、劇団あしぶえによる公演「安寿と厨子王」の補助作業を行った。 具体的には、しいの実シアターにおいて開催された公演において、会場準備・清掃、入場案内、湯茶の提供等を行った。</p> <p>オ 研修ふりかえり会（12月26日） 園山理事長、有田事務局長、同時に派遣されていた松江市職員を交えた4人で今回の短期派遣研修の結果を踏まえて、平成26年度に開催予定の八雲国際演劇祭や、今後のあしぶえの活動等について意見交換を行った。</p>			
③ 研修の感想			
<p>（研修の全般的な感想、各団体での活動の意義や協働に対する感想（研修前後における意識の変化）等について記入してください。）</p> <p>研修を終えた感想として、特に強く感じた点を記載したい。</p> <p><b>★演劇のもつチカラ</b> 今年度の劇団あしぶえの公演は、「安寿と厨子王」であった。 森鷗外の「山椒大夫」が原作で、姉弟が流刑になった父を探す道中、人買いに売られ母と生き別れるシーンから始まり、労働に耐え、長い時を経ても両親との再会を信じ続けるというストーリーの公演だ。 また、私の希望により、研修とは別に、個人的にちょっとした役ではあるが「安寿</p>			

と厨子王」に出演させてもらった。

このため、本番だけではなく、何度も練習に参加させてもらい、舞台裏まで見る機会を得た。

その結果、分かったのは、演劇とは、人々の思いや喜怒哀楽をダイレクトに表現する芸術であり、俳優の演技だけで成り立っているのではなく、照明、音楽、衣装による総合芸術だということだ。

すべてが渾然一体となっていないと、良い演劇にならない。

僕みたいなずぶの素人でも、何度も何度も見ていると何となく分かる。ほんのちょっとした間の一つで、場面が拍子抜けしてしまったり、逆に舞台上のすべてがうまくいくと、同じシーンを以前見ても心が再び動く。

だから、演者も、演出者も、音声も、照明も限られた時間の中で何度も練習し、よりよい演劇を作ろうと努力を重ねる。

そして、チケットを買ってくれた本番でお客様を満足させなければならない。

当たり前の事だが、チケット料金をいただくって難しい。ましてや、お客様に感動を与える事によってチケット料金をいただくとすると非常に難しい。

観客は、チケットを購入したお客様だ。所詮は素人役者だからとか、練習時間が無かったからなどの言い訳は許されない。

観客は、完成された演劇を見たいのであって、練習の成果や、演者の自己満足が見たいわけでない。心が動かされなければ、次回来場しなくなるだけの事だ。

一旦幕が上がれば、もう後戻りは効かず、演者と観客がストーリーを作っていく。

そこにあるのは、喜劇だろうか、悲劇だろうか、根底にあるのは真摯さと、共通体験、それを介して伝わっていく思いだ。

この共通体験を生むという点から、演劇という手法は、想像力や、感受性、表現力等を複合的に育てる効果があると思った。

また、これらの事は、特に小学生のワークショップでの様子からも同様の事が感じられた。

ようするに、良い演劇は人の心を動かすし、良いワークショップは参加者に何かを残す。だから、また次回も見たいし、また次回も参加したくなるのだ。そしてやっとお金を稼ぐ事ができるわけだ。

こんなおもしろい芸術である演劇であるが、と同時に行政との関わりは依然として難しさがある事は、現状を見るにつけ明らかだ。

日本においては、芸術と公費支出の間には高い壁がある。それは、行政側の無理解、また、一般人の無理解に起因するものである。

しかし、あしぶえには、その壁を乗り越える答えがあると感じた。

ふりかえりの時間に、園山さんに言われた事で印象深い一言がある。「私は、良い役者を作るための演劇をしているわけではなくて、人々が豊かな暮らしをしていくための演劇こそが大切なんだ。」

まさしくこれこそが答えであろうと思う。

地方自治体はお金を使うだけではなく地域のリーダーを育て、人間力・地域力をはぐくみ、地域の「豊かさ」を醸成する事が求められる時代になりつつある。

その際に、地方自治体にとっては、演劇による人づくり・まちづくりは、きっと強力なツールの一つとなると思う。

その時代にあって、松江市にあしぶえという長期間それを主眼に置いて活動をしてきた団体があるという事、また、松江市八雲町の森の中に、とても姿の良い劇場「しいの実シアター」があるという事は、島根県にとってとても有意義であると感じた。

### ★ボランティアのチカラ

参加するまで非常に不思議に感じていた点がある。役者や演出家が積極的なのはわかる。なぜなら、彼らは観客にむかって表現ができる。見てもらえる、拍手をもらえるという満足が得れる。

では、それを下支えするボランティアの方々は何で自分の時間を犠牲にして参加するのか。演劇を見たいだけならお客さんとして見に行くだけで十分では？

あしぶえの公演時には、地元の「サポート会員」や観客の中から、20～30名のボランティアが、「表方」として参加する。

「表方」とは、チケット販売やもぎり、アンケートやチラシの配布、場内整理、駐車場の誘導、グッズ販売など、劇場の「表」で観客に接する仕事である。

ここで改めて考えるに、ボランティアという言葉には無償の奉仕・滅私奉公というニュアンスが強い。

しかし、このスタッフにおいては、ボランティアというより、自分達も楽しむ、自分達にとっても有益だという観点で、その活動を楽しんでいると感じられた。

つまり、自分達の創意工夫で、お客様をより満足させる事ができる、突然の状況変更をポジティブにとらえ、その状況に上手く対応できると、自分達でやってやった！！という自己肯定に繋がる…というような、あしぶえでのボランティア活動によって、自分の心に対して、有形ではないがはっきりとした見返りがあるととらえているのだ。

その証拠に、あしぶえのボランティアの中には、その活動に参加してみて「生き方が変わった。」「役者さんが頑張っているから、自分達も頑張れる。」といった感想を持たれる方が多いそうだ。

ネガティブな気持ちで参加しては決してこの気持ちにはなれないだろう。

これが、細くても太くても長く活動を続けられる原動力であるし、また、活動における創意工夫・モチベーションの高さの土壌になっていると感じられた。

短期間での研修であり、私が垣間見たのはNPO活動のごく一部ではあったと思うが、色々と勉強をさせていただき、貴重な経験となった。

最後になりましたが、あしぶえの皆さん、大変お世話になりました。ありがとうございました。

### ④ その他特記事項

(※今後の研修実施に当たっての改善点、留意しておくべき事などがあれば記入してください。)

平成26年秋には、しいの実シアターを中心に世界の優れた劇団が集まって3年に1回開かれる「八雲国際演劇祭」が開催される予定である。

この演劇祭は、数百人のボランティアスタッフによって支えられている。

演劇祭は、スタッフによって送迎や宿泊、食事、案内などさまざまな仕事をみんなで分担しながら運営されるものであり、あしぶえではいくら手があっても足りないほどの状況になる。

このため、是非多数の研修生があしぶえでの短期派遣研修を受けて欲しい。

研修をやり遂げた後には、非常に多様な経験ができ、加えて、演劇の楽しさ、素晴らしさを体感できると思う。

しいの実シアター・NPO法人あしぶえのホームページ

<http://www.yitf.org/>

(注1) 研修日時・内容等が分かる資料があれば、添付してください。

(注2) 研修終了後、報告会を開催します。

## 活動の様子



- ・カナダの劇団コーパスによる「ひつじ」の公演。
- ・しいの実シアターの前に牧場が作られ、羊飼いに連れられてひつじが入場してきた。天気が良い日に外で見るのが一番いい演目だと思う。



- ・団員の中に一人だけ日本の方がおられ、これは、その日本ひつじの写真。
- ・ひつじが近づいてくると、子ども達がとても集中する。何人かの子どもは、後ろのほうに飛んで逃げてしまっている。



- ・ 秋に開催された「しいの実シアター」周辺の草刈りの参加者。
- ・ 非常に広範囲の作業になるので、とてもシアター職員だけでは手が足りず、地域住民の方のボランティア参加は非常に助かっている。



- ・ 「しいの実シアター」の周辺は、斜面が多いので、草を刈るのも、刈った後の草を斜面から下ろすのも重労働だった。



- ・ 仁摩小学校 1 年生のワークショップの様子。
- ・ これは「洗濯機と洗濯物」というゲーム。洗濯機から飛び出した洗濯物はほかの洗濯機に入らなければならないが、これがなかなか上手くいかない。



- ・ 仁摩小学校 6 年生のワークショップの様子。
- ・ 6 年生になるとずいぶん自己表現が上手になっている。すぐに役割をきめ、与えられたゲームの中で、楽しむという事ができるようになっている。



- ・劇団「あしぶえ」の公演「安寿と厨子王」のクライマックスシーン。
- ・生き別れた母親と厨子王がやっと出会うが、そこには厳しい現実がまっているという観客の涙腺を直撃するシーン。
- ・この写真を見ると、この場面のセリフと音楽が鮮明に頭の中に蘇る。



- ・私が出演させてもらった「追っ手」のシーン。
- ・真ん中に立っているのが親分の「三郎」様で、私はその手下の一人。写真では、誰が誰か分からないが、公演を見たうちの子ども達は「お父さん、ちょびっと出てたね。」ととても喜んでいました。